

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	二十世紀初頭のカザンザキスの政治活動とナショナリズム : デイモテキ運動とドラグミスからの影響
Author(s)	福田, 耕佑
Citation	プロピレア , 23 : 12 - 30
Issue Date	2017-08-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00044336
Right	Copyright (c) 2017 日本ギリシア語ギリシア文学会
Relation	



二十世紀初頭のカザンザキスの

政治活動とナショナリズム

—ディモティキ運動とドラグミスからの影響—

福田 耕佑

京都大学文学研究科博士課程後期

日本学術振興会特別研究員

1. はじめに

本稿は、ニコス・カザンザキスの少年期から 1922 年までのナショナリズム的傾倒を持った経歴と作品を分析し¹、この時期と 1922 年以降の彼がナショナリズムを捨て去ったと明言した時期との間に、「ギリシア性」の考察に繋がる思想的連続性が存在することを明らかにする²。

2. 本稿の意義

該当期において、カザンザキスは「貴族的ナショナリズム」に傾倒し³、また四章以降で述べていくように、実際にナショナリズム的な政治活動を行った⁴。また書簡でもカザンザキス本人が 1923 年までナショナリズム的な考えを持っていたこと、そして 1912 年から 22 年までドラグミスの思想に傾倒していたことを述懐している⁵。

しかしこの時期の文学作品や翻訳活動は、彼の女性観や恋愛観そして西欧思想の吸収や翻訳が中心であり、一見したところ政治活動と執筆活動の間に一貫性が見られない。そして古典古代ギリシアがしばしば作品に描かれるが、これは単にモチーフや技巧のためであり、ギリシア・ギリシア人観に関する思想的考察は見られない。当時のカザン

ザキスに大きな影響を与えた、その文学作品と政治活動が一貫してナショナリズム的だったイオン・ドラグミスとは大きく異なる⁶。次章で紹介するように、先行研究においても1922年以前と以後では断絶が強調されるか、カザンザキスのナショナリズムについてはほとんど触れられない。本稿を通して、カザンザキスがナショナリズム的思想からも一定の影響を継承したこと、そして彼の文学活動の「ギリシア性」の探求の出発点と連続性が本稿該当期に存在することを明らかにする。

3. 先行研究の紹介

該当期のカザンザキスの経歴については主にジャンオ・リュストとビーンの伝記的研究に基づいている⁷。またカザンザキスの政治活動に関する活動はゼルミアスに、そして作品分析はペトラクとゲチュの研究が挙げられる⁸。特にゲチュの研究は一つ一つの作品の登場人物のモチーフを特定しながら、細かい文学的な分析を行っている。しかしゼルミアスの研究以外は該当期のカザンザキスのナショナリズムを取り上げておらず、またゼルミアスは作品分析を行わず、当時の出来事の解説に留まっている。また全体として、カザンザキスの活動と関心が多岐に渡るが故に、分析のトピックが散在し、該当期のカザンザキスのナショナリズム観に正面から取り組んでいない。故に本研究は先述の通り、分析対象をカザンザキスのナショナリズム的思考及び政治活動に絞り、後のカザンザキスの思想と活動に繋がる「ギリシア性」の探求を中心に、該当期の思想と活動を全体の中に位置づけたい。

4. カザンザキスの思想的・歴史的背景

本章では彼の少年期から1922年までのカザンザキスのナショナリズムとギリシア・ギリシア人観を考察するための背景説明を行う。第一節では、カザンザキスの該当期における経歴を説明するために必要な歴史的背景を簡単に説明する。第二節では、カザンザキスに影響を与えたイオン・ドラグミスをはじめとする、十九世紀から二十世紀初頭におけるギリシアの知識人達の動向について概説する。最後に第三節でイオン・ドラグミスの思想と政治活動を取り上げ、該当期のカザンザキスを論じるための背景を整理する。

4-1. 独立後のギリシアの領土拡張とその失敗

本節ではギリシアのナショナリズムに基づいた領土拡張の経緯を主にテラドとパドプロスの研究に基づきながら簡潔に説明する⁹。

1821年の革命に始まるギリシアの独立以降、ギリシアは領土を拡張していく。この対外領土拡張を支えた思想としてしばしば言及されるのが「偉大な理想」(Μεγάλη Ιδέα)である。これは1844年にイオアニス・コレッティス¹⁰の演説の中で初めて言及される¹¹。この中でコレッティスはテッサリアやイスタンブール、そしてトラブゾン等小アジアを含む広大な地域をギリシア領として要求した。この演説は、ギリシアが東方と西方の間、ヨーロッパの中心に位置し、西方がギリシアを啓蒙したように、東方を啓蒙することが自分達の宿命である、という宣言から始まる¹²。そして古典ギリシアと不滅のアテネの栄光に触れながら、列強に支援を呼びかけ、ギリシア人に団結を促す¹³。ここに見られる意識は、自分達が偉大な古典古代ギリシアの末裔であるという意識と、自分達を支配していた東方に対する偏見と優越の意識である¹⁴。

実際にギリシアが北部への軍事的な拡張を起こすのは、トルコの意識が1853年に勃発したクリミア戦争によってバルカン半島に向けられていなかった、1854年からである¹⁵。以降列強の介入とギリシア政府の内政の影響を受けつつも、露土戦争の影響を受けた1878年と1904年から1908年までに三度大きな領土獲得運動を起こしている。特に1878年の三年後にはアルタとテッサリア地方を獲得する。これらの拡張の特徴として挙げられるのは、単に政府や知識人達だけがこの動きを促進したのではなく、あらゆる階層のギリシア人がこの運動を歓迎し、これに参加したことである¹⁶。

しかしこのギリシア人の領土拡張は、テッサロニキを含む南方への領土拡張を目論むブルガリアと潜在的に利益が衝突する。すなわちブルガリア側も、元来オスマン帝国内の全正教徒を管轄していたギリシア総主教座からのブルガリア総主教代理座の独立(1870年)と同時期のマケドニア地方でのブルガリア人学校の建設をもって、マケドニア地方におけるブルガリアの利益の保護を進めるようになる。次節で後述するが、この動きに対しイオン・ドラグミスやその父のステファノス・ドラグミス¹⁷等のギリシアの政治家や知識人達がブルガリアの脅威、

「マケドニア問題」を説き、それぞれの行動を行うことになる¹⁸。

そして二十世紀に入り、1909年の軍のクーデターと1910年の総選挙の後、同年11月にヴェニゼロスが首相に任命される。1912年10月には第一次バルカン戦争が始まり、この戦争に勝利した結果ギリシアはイピロス地方を獲得する。そして1913年6月からの第二次バルカン戦では、テッサロニキ、クレタを獲得し、念願であったクレタの統一(Ενωσις)を達成する。そして第一次世界大戦において、ヴェニゼロスは中立を主張する国王派と対立しながら、1916年にテッサロニキに臨時政府を設立して協商国側として参戦し、1920年の総選挙での敗北まで首相を務めた。ヴェニゼロスは退陣前にアナトリア南部に派兵を行っていたが、1922年にはヴェニゼロスの後任の国王派の政府が希土戦争で敗北し、小アジアからの撤兵を行う。こうして小アジアのギリシア領を失陥し、ギリシアの領土拡張は停止する。

4-2. マケドニア問題と知識人の動向

本節では、当時のカザンザキスに影響を与えた知識人達の動向を概観する。特にドラグミス父子の活動と思想、そしてディモティキ(民衆語・口語)運動の経緯を、主にテラドとホレバスの先行研究に基づきながら記述する¹⁹。

ステファノス・ドラグミスは、初代ギリシアの大統領を務めたカポディストリアスの秘書や、オトナー一世の外務大臣を務めた父ニコラオスの子供として、西マケドニアに起源を持つ有力者の家系に1842年に生まれる。パリで法学を修めた後、司法関係で働き政治家になる。1877年から始まる露土戦争を受け、グナシオス・マケドノス(Γνάσιος Μακεδνός)の偽名を用い、『マケドニアの危機』と『裏切られたマケドニア』を著し、ギリシア人に「マケドニア問題」に対する覚醒を促した²⁰。そして1878年1月には弁護士仲間を中心に志願兵や武器を集めマケドニアを援助することを目的にアテネでマケドニア委員会を設立し²¹、個人的にもオリンピア地方への派兵を行う等、積極的にナショナリストとしての活動に参加していた²²。

イオンはこのステファノスの子供として1878年にアテネに生まれる。アテネ大学で法学を専攻し、1897年には父の反対を押し切って希土戦争に志願兵として赴くも、戦場に着いた時点で戦闘は終了し、ギ

リシアは敗北していた²³。父ステファノスの影響を受け、青年期からこのようなナショナリストとしての行動を起こしている。そして1899年から外交官として1915年まで務める。モナスティリやセッレス、アレクサンドルポリ等のマケドニア地方の諸都市だけでなく、ローマやロンドン、イスタンブールでも勤務する。特に1902年から勤務し始めたモナスティリでは、父と同様ブルガリアの失地回復運動に対する脅威を説き、ギリシア人に対する覚醒を訴えた。

1902年には『小道』(Το Μονοπάτι)で作家としてデビューし、1907年の『殉者と英雄の血』(Μαρτύρων και Ηρώων αίμα)では、マケドニアを巡る戦争の中で犠牲になったパヴロス・メラスを英雄として称え、共に、「若者達に捧げる」から始まり、本編を通して若者達に対する覚醒を呼びかけている²⁴。そして1908年にはカザンザキスが熱烈に支持した『サモトラキ』(Σαμοθράκη)の中でも続けてブルガリアに対する脅威とギリシアの統一のために生きることを若者に呼びかけ²⁵、そして1914年には『ギリシア文化』(Ελληνικός Πολιτισμός)等の作品を発表していく。特にマケドニアに対しては、「もし私達がマケドニアを救うために駆け付けるなら、マケドニアが私達を救うであろうことを諸君は知れ」と述べ²⁶、マケドニアを「自由の学校」と表現する²⁷。

1915年にはヴェニゼロスの政策に懐疑的になり、代議士に立候補し、1916年1月には雑誌「政治評論」(Πολιτική επιθεώρησης)をテッサロニキで開始するも、ヴェニゼロス派がテッサロニキを掌握していたこともあり1917年7月からはコルシカ島に亡命する²⁸。そして1920年1月にヴェニゼロス派の将校によってアテネで暗殺される。彼の思想の概観は次節で行うが、政治的行動及び作品共に一貫してナショナリズム的であった。

4-3. イオン・ドラグミスのヘレニズムとディモティキ

本節ではイオン・ドラグミスの文学作品等に現れる、共同体論としてのヘレニズム(ο Ελληνισμός)とディモティキ(民衆語)についてテラドとホレバスに依拠しながら概説する²⁹。

彼のヘレニズムはパパリゴプロスの近代的・民族的なヘレニズムを継承している³⁰。パパリゴプロスは、ギリシア人共同体が古代から現代まで途切れることなく存在し、このヘレニズムが、ギリシア語を話し

ギリシア的に生活するギリシア人の文化活動や生活習慣として十分に体现されてきた、と説明した。そしてこのヘレニズムは国外のギリシア人とその居住地の政治的な統一を主張する戦闘的なナショナリズムに結びついていく³¹。

(1)ヘレニズムとギリシア文化

テラドによると、パパリゴプロスを下敷きにしたドラグミスのヘレニズムは、ギリシア人が主権を持つ共同体を意味し、ギリシア人の国家とその統治機構、或いはその形態等が問題になることはない。そして彼は言葉によってギリシアを実質的に定義することを拒否し、自明で神秘的なものとして理解している³²。

ドラグミスは、このギリシア共同体のヘレニズムの使命として、高次文化の創造を挙げている³³。古代よりギリシア文化は他の文化に対して特別であり、民衆の中で高次の文化を生み出し、周辺のギリシア人でない者達をもギリシア人化させてきたと主張している³⁴。そしてギリシアやギリシア文化は、たとえスウェーデン人やアイルランド人であっても、彼らもギリシア人化することができると述べる³⁵。彼は血統の連続性によってギリシア人が定義されるという意見を退けたが、ギリシア文化に対し特別な地位を与え、強い優越意識を抱いていることは明白である³⁶。

(2)ギリシア文化とディモティキ

ギリシア人の言葉と生活の中で体现されるヘレニズムにとって、民衆達が話す言葉、ドラグミスが生きた時代のギリシア語であるディモティキは、単に政治や経済的な意味でのみ重要視されるものではない。ドラグミスは、学校の建設運動に関する提言や1910年の教育協会(Εκπαιδευτικός Όμιλος)の設立に関わり、政治活動的にもディモティキの運用に関する運動に携わった。文学活動においても作品をディモティキで著し、思想的にも民衆とギリシア文化の文脈を通して、自身の思想の中に体系的にディモティキを取り込んだ。彼にとってディモティキとその伝統は、未来の高次文化創造の担い手であり、ギリシア文化の木の本の幹であり³⁷、民衆の知恵(Σοφία του Λαού)であった³⁸。だが『ギリシア文明』において、民衆の言葉や習俗、家屋や踊りにギリシ

アの伝統が残り、着目すべきだと述べるが、ドラグミスの視点は、これらをヘレニズムのために必要な要素であるが故に語っているのであり、民衆の視点や思考、また民衆の側にたった言及は存在しない³⁹。

(3)東西の中心としてのギリシア

またドラグミスによると、このギリシア語を話す民衆の共同体は過去から現代に至る時間的な連続性を持って存在しているだけではなく、東方と西方に跨る地理的な連続性を持って存在してきた⁴⁰。これは政治的には先述のコレットィスの演説、そして思想的にはヤンノプロスの「ギリシアの大地」を念頭に置いている⁴¹。ドラグミス自身バレスやニーチェ等西欧の思想を受容し、西欧を合わせ鏡に自分達ギリシアを位置付けた。そして西欧の文物をギリシア化し、ギリシア人の言葉と思想に組み込んでいくために著作し思想した。ギリシアは東西の中心に位置しているが、ギリシアはドラグミスにとって確かにヨーロッパの一部である。そしてこのヨーロッパは単に地理的な意味だけではなく、西欧の文明を生み出し育てた揺籠であり、またこの西欧から受けた恩恵を用いながら東方を啓蒙する光としてのヨーロッパを意味する。このように、民衆や東方といった啓蒙主義的な古典ギリシア像とは異なるギリシアの見方を用いつつも、実際にはその思想は中央の知識人としてのギリシア文化の優越心に支えられていた。

ここまで第四章では十九世紀の後半から二十世紀初頭までのギリシアの領土拡張とカザンザキスに影響を与えたナショナリズム思想、特にイオン・ドラグミスの政治的活動と思想について概観した。次章ではカザンザキスの経歴と作品を紹介しながら、ドラグミスのナショナリズム的な政治活動と文学がカザンザキスに与えた影響を説明する。

5. ニコス・カザンザキスの政治活動と文学

本章では、第一節で該当期のカザンザキスの経歴について概説し、第二節で彼のナショナリストとしての政治活動と該当期の作品について分析し、1922年以降のナショナリズムを捨て去ったと彼が宣言した時代以降との連続性を見出す。

5-1. ニコス・カザンザキスの動向について

本節では主にジャニオ・リュストとビーンのカザンザキスに関する伝記や先行研究を用いて彼の1922年までの動向を記す⁴²。

カザンザキスは1883年オスマン帝国統治下のクレタ島に生まれる。1897年に発生したギリシア人達のオスマン帝国への蜂起に際し、ほぼ難民のような形でナクソス島に移住し、現地のフランス系カトリックの学校に通い、初めて西欧の文学や思想に触れる。1899年にはクレタ島に戻り、現地のギムナジウムに通う。この中で重要な出会いとして、後にアテネ大学の教授を務める神学者アンヅウルソス⁴³、後に妻となるガラテア・アレクシウ、そして彼の作品の中で憧憬の対象として描かれる彼の英語教師のアイランド人女性が挙げられる。

1902年9月よりアテネ大学法学部で学ぶ。この間のカザンザキスの動向については書簡等によっても明らかではない。在学中の1906年には以下に記す作品やその他の文章を民衆語で発表する。

一点目はピナコティキ誌にカルマ・ニルヴァナ名義で発表したエッセー『悪の世紀』である。この中でカザンザキスは科学と古代ギリシアへの情熱に基づいて、キリスト教が古代ギリシア人の肉体と精神の調和の智恵また美そのものを破壊した、と説いた。二点目は『夜は明ける』という戯曲である。この中でギリシアの家庭と女性を取り上げ、アテネの中流階級層から高い評価を受け、翌年には実際に上演される。三点目はある芸術家の日記という体裁を取った小説『百合と蛇』である。この中に後年の肉体性を靈性に変化させていくことで自由に至るという彼の思想の雛型が見られるが、以上三作品においてモチーフとして古代ギリシアの文物が登場し、古代ギリシアへの偏愛が垣間見られるも、ギリシアやギリシア人に対する思想的な考察は行われぬ。またここまでの作品では表記の揺れや民衆語と文語が混ぜられた文体が見受けられ、カザンザキスのバイリンガリズムとして指摘された⁴⁴。

1907年の4月から6月までアクロポリス紙でコラムを担当している。ディモティキ使用の推奨やトルストイ追悼等幅広いテーマで執筆しているが、ここに政治的な主張やプロパガンダ等は見られない⁴⁵。9月にはピナコティキ誌で戯曲『ファスガ』を発表し、戯曲『いつまで』を執筆するが散逸している。9月アテネ大学を優秀な成績で卒業し、パリに留学するためにアテネを離れる。

1907年10月パリに到着する。この留学期間にベルクソンとニーチ

エの思想に出会う。ニーチェに関しては 1909 年にクレタ島で博士論文『フリードリッヒ・ニーチェ 正義と国家の哲学』として出版し、ベルクソンに関しては 1912 年に彼に関するエッセーを執筆しているが、彼らの思想とカザンザキスの関係に関する先行研究は十分に存在し、本稿のテーマとも異なるので扱わない。

1909 年の帰国以来、クレタ島での積極的な政治活動が始まる⁴⁶。政治活動としてはクレタ島のディモティキの使用を推進するソロモス協会の会員に名を連ね、プロパガンダ活動に協力する。また戯曲『喜劇』を出版し、次節で取り上げる戯曲『棟梁』、そして小説『崩壊した魂』を執筆する。

1910 年はカザンザキスの活動が最も多産な年であり、前年執筆した二冊を、ドラグミスも参加しているディモティキ推進派の雑誌『ヌーマス』で発表すると共に 4 月からアテネに居住し、前章で見た教育協会の設立に参加し、ドラグミスと面識を持つ。特にカザンザキスは「我ら若者達へ」という『サモトラキ』の書評を執筆し、ドラグミスを若者達の指導者として称揚し、彼の呼びかけに答える文章を執筆している⁴⁷。また金銭的に生活が厳しい状況にあったにもかかわらず、6 月に教育省への入省を勧められたが、自由な執筆と旅行のためにこれを拒否し、教育関係の各所に出入りしながら、翻訳や執筆で生計を立てる。11 年にはウィリアム・ジェームズの『感情論』を翻訳する。

12 年から 13 年には、ドラグミスの呼びかけに答える形で、ナショナリズム的行動としてバルカン戦争に志願兵として従軍する。しかし実際には戦地に赴くことなく、ヴェニゼロスの秘書として彼の事務所で勤務する。12 年はニーチェの『悲劇の誕生』、『ツァラトウストラはかく語りき』そしてプラトンの作品を 5 つ翻訳している。そして 13 年はエッカーマン、レッサン、メーテルランクの三人の作品を翻訳する。

14 年はガラテアと子供向けの本の執筆を行い、9 月には教育協会の事務所でシケリアノスと知り合い、意気投合し、「この大地とこの民族を知る」ためにアトス山と各地ギリシア旅行に出発する⁴⁸。15 年は旅行と読書に明け暮れ、ダーウィンの『種の起源』やベルクソンの『笑い』を翻訳すると共に、トルストイ等多くの作家の作品を読みふける。16 年の 2 月からオスマン帝国との戦闘で荒れ果てていた炭鉱を活用するために、ヨルゴス・ゾルバスと共同で鉱山開発事業に乗り出すも失

敗。17年9月より友人を訪ねスイス旅行に出発する。

18年10月に帰国して後、ヴェニゼロス政権下で19年5月8日に厚生省の局長に任命されコーカサス地方で難民ギリシア人・ポントス人のギリシア本国帰還支援を行う。また同月15日にイギリスの支援の下休戦協定を破ってギリシア軍がイズミルに侵攻している。そしてカザンザキスはカルスやバトゥミで支援活動を開始する。アルメニアを経て計15万のギリシア人を収容しギリシア本国へ帰還させ、難民がマケドニアとトラキア地方に定住する支援を行い、20年9月にヴェニゼロスの選挙での敗北により罷免されるまで同職に留まる。

罷免後の20年9月から21年8月まで、パリやオーストリアなどのヨーロッパ旅行に出かけ、クレタ島に帰郷し、政府の役職には関心を払わなくなる。22年5月にはウィーンに到着する。そしてウィーンで病に陥るも、フロイト心理学や仏教等新しい学問の研究を始める。9月1日にはベルリンに到着し、8日の小アジアでのイズミル陥落と11日の軍事クーデターの知らせを当地で耳にすることになる。

5-2 カザンザキスの作品と思想

本節ではカザンザキスのナショナリストとしての活動とディモテイク主義者としての活動、また作品の分析を通してカザンザキスの民族主義に対する態度と後の彼の思想との連関について明らかにする。

(1)カザンザキスの政治活動

ビーンはカザンザキスがパリへの留学以降にナショナリズム的な運動に参加するようになったことを指摘している⁴⁹。前節でも説明したが、カザンザキスが政治的な運動に参加したのは、主に1912年からのバルカン戦争への従軍と1919年のイズミル侵攻と同時期の厚生局局長就任である。この間の時期はヴェニゼロスの権力の空白期であり、これよりカザンザキスが政治活動を行えたのは、ヴェニゼロスの政治的主導権力下でのみにおいてであることが明白である。そしてバルカン戦争への従軍は「我ら若者達へ」に見られるようにドラグミスへの呼びかけに応えたものであり、また『棟梁』がドラグミスに捧げられていることから、ドラグミスの影響も甚大であった。

しかし、カザンザキスがヴェニゼロスやドラグミスをどこまで信用

していたかは書簡及び手紙にはほとんど書かれておらず、その判断は困難である⁵⁰。ヴェニゼロスとの距離が不明確である上に、ドラグミスが反ヴェニゼロス派の立場を明らかにした後の19年に、カザンザキスがヴェニゼロスの政権下で局長に就任した以上、最終的にドラグミスとも一定の距離があったことも明らかである。このように思想的には、ドラグミスとヴェニゼロスの強い影響下にいたが、政治的には両者に対し一定の距離を取り、積極的とはいえない関与を続けていた。

(2) 『棟梁』 分析

『棟梁』はカザンザキスがパリでナショナリズムの影響を受けた後1909年に書かれた戯曲であり、最初は『犠牲』(η Θυσία)の題名で執筆された。前節でも紹介したように、ドラグミスの呼びかけに応える形で彼に捧げて執筆した本であり⁵¹、女性観や西欧哲学等に意識が向けられた他の作品と異なり、一種のプロパガンダ的要素を持つ。

この戯曲は「アルタ橋」の民間伝承から取ったものであり、下記にあらすじを簡略に説明する。主人公の棟梁(Πρωτομάστρας)は氾濫を繰り返し、村に被害を与え続けている河に橋を架けるが失敗する。村の祈祷師である老婆(Μάνα)が、棟梁の愛する、村の長老の娘・スマラグダ(Σμαράγδα)を橋の基に生贄に捧げれば、橋は建つと予言した。棟梁とスマラグダは互いに愛を伝え合うが、最後には両人で決断し、スマラグダが犠牲となり村に橋が完成する。

先行研究の分析によると、主人公の棟梁にはドラグミスが投影され、「英雄よ！金髪の勇者よ！」、そして「私はラーヤーではない！」という不屈の英雄として描かれ⁵²、河には運命が、そして激流に押し流される橋にはギリシアが投影されている⁵³。

パリ留学以前からのカザンザキスの文学的な傾向として、古典ギリシア趣味と、女性の肉体への執着、そしてその欲望に代表される「肉」を「霊」へと乗り越えるという思想が見られる。前者に関しては、恐怖に駆られいつも喚き、棟梁らの失敗を責めるだけの村人達が古典劇のようなコーラスとして設置されていることからこの作品にも見られることが明らかである。後者に関しては、祈祷師の老婆が、棟梁に対し、「女の肉体、柔らかさとその熱に震える彼の手は、偉業を成し遂げるには純粹ではない。バラのように香しい女の接吻が、彼の目の前に

嵐を織り上げ、はっきりと向こうを見えなくしてしまう！」と述べているように、内面的な恋愛以上にスマラグダに対する肉体的な欲望が前面に語られる⁵⁴。この肉体への欲望を乗り越えるために、そしてギリシアに見立てられた橋を建てるために、『棟梁』ではスマラグダという自分の最も愛する者を犠牲に差し出すという構図が取られる。この作品において、パリ以前からカザンザキスの中で引き継がれている「肉を霊に」変えるというモチーフと、ギリシアのために犠牲を捧げるというモチーフが同時に表現されている点で、当時のカザンザキスの二つの関心が文学作品の中で同時に表現されている。

この作品は、全文のほとんどがディモティキで書かれており、雑誌の賞を受賞し賞金を獲得する等一定の成果を収めたが、後の書評などで全く取り上げられることがなく⁵⁵、彼のナショナリズム的な呼びかけに応えた事例は見られなかった。この点でドラグミスのようにギリシアのために「犠牲」を捧げるように呼びかける目的では完全な失敗であり、これ以降プロパガンダ的な作品を再び書くことはなかった。

(3) 翻訳と教育

カザンザキスにとって、翻訳と教育はディモティキによって結びつく。確かに 1909 年のソロモス協会と 1910 年の教育協会において政治活動に参加したが、パリに留学しナショナリズム的関心を持つ以前より、ディモティキで美的作品を生み出す意志をもっていたことは、アクロポリス紙のコラムや『百合と蛇』等の作品より明らかである。特に 1910 年の『崩壊した魂』における『イリアス』からの引用では、古典本文からではなく、パッリス⁵⁶のディモティキ訳から引用しており、ディモティキ主義者の立場を一層明確に表明している⁵⁷。

前節でみたように、1911 年よりベルクソンやダーウィン等西欧の思想を紹介し一種の啓蒙運動を行いつつ、14 年には妻のガラテア・アレクシウと共に子供向けの書籍の創作を行う。これは文語でなくとも、ディモティキが十分に高度な思想を扱い、芸術性の高い創造を行うのに適した言語であることを示し、結果としてドラグミスのディモティキが未来のギリシア文化の創造を行うのに適した言語であるというテーゼを証明し、実現しているものである。カザンザキスはこれ以降も子供向けの本を書き、そしてダンテの『神曲』(1934)や『イリアス』の

現代語訳(1941)を行う等この姿勢は生涯変わらず一貫している。

(4)1922年以後のカザンザキスの「ギリシア性」

「連続性」と「東西の融合」といった、後のカザンザキスのギリシア・ギリシア人観における中心概念となる「ギリシア性」に関して⁵⁸、第四章で見たように「東西の融合」と「ギリシアの大地」の語は、直接にはドラグミスに由来する用語である。

この「東西の融合」に関して、17年のスイス滞在時のカザンザキスがアンゲラキに宛てた手紙が重要である。その中で、「私の全魂は、跪拝する回教徒の魂のように、東方(Ανατολή)へ回帰する。(中略)私は今や自分自身がアフリカのクレタ島の、アラビア人達の子孫であることが分かった。神よ、私達の血が今尚生き、治めるアナトリアを旅させてください。」と書き送っている⁵⁹。

コレッティスやドラグミスの東方への言及は、常にギリシア中心的であり、彼らの「ギリシア化」に見られるように、ギリシアが他文化と他民族を優越し包含する形を取っている。カザンザキス自身はギリシア人の連続性を前提にしながら、特に第二次世界大戦以降顕著に見られる、東方やアフリカにも自分達の起源を積極的に置こうとし、アテネから見て周辺に生きていたポントスのギリシア人にも焦点を当てていく、脱中心主義的な傾向の芽生えがこの手紙に見られる。

またドラグミスの「もし私達がマケドニアを救うために駆け付けるなら、マケドニアが私達を救うであろうことを諸君は知れ」という定式は、後年のカザンザキスの哲学的著作『禁欲』の「もし私達が自分自身の闘いで神を救うことができないのなら、神は救われぬ。神が救われぬのなら私達も救われることはあり得ない。私達は一つである」という最重要表現に受け継がれていく⁶⁰。

6. 本稿のまとめ

ホレバスとテラド共に、イオン・ドラグミスにはメガリ・イデアを推進した政治活動家・実践家としての一面と、ギリシア民族とヘレニズムについて考察した文学者・理論家としての一面を持つ「二面性」があったことに言及している⁶¹。ここまで確認してきたように、カザンザキスは政治活動面では積極的にドラグミス派であることもヴェニゼ

ロス派にも属さず、ドラグミスの死とイズミルの陥落によってメガリ・イデア的思想や政治活動家・実践家としてのドラグミスを放棄し、後に共産主義へと傾倒していく。

しかし、23年の『禁欲』執筆以降も、『饗宴』や40年のドラグミスへの追悼文に見られるように、カザンザキス自身『禁欲』の思想や19年のポントス人援助支援の体験を文学作品に昇華する形でドラグミスの文学と思想に向き合っていく。より直接的な影響として、ドラグミスから「ギリシア性」の思想に関する概念や『禁欲』の重要な部分の表現を受け継いだことは確認した。

該当期のカザンザキスは、1910年以降ナショナリズム運動に近い立場に身を置き、自身もその行動に身を投じたが、これらのプロパガンダが文学作品の中に中心的に現れることはなく、またギリシア・ギリシア人観の考察も行われず、ナショナリストとしての立場を放棄したことを本稿において確認した。しかし、これまで決別が強調されてきたドラグミスの、文学者・理論家としての一面から得た文学上の影響や概念の影響は大きく、積極的にカザンザキスが自身の文学の中に取り入れ、また乗り越えるべきテーマとして残り続けていく。

参考文献

一次文献

Δραγούμης, Γωv (1991) *Ελληνικός Πολιτισμός*, Νέα θεσίς, Αθήνα.

Δραγούμης, Γωv (1994a) *Μαρτύρων και ηρώων αίμα*, Εκδόσεις ΒΑΣ. ΠΗΓΟΠΟΥΛΟΥ, Θεσσαλονίκη.

Δραγούμης, Γωv (1994b) *Σαμοθράκη, Το νησί*, Εκδόσεις ΒΑΣ. ΠΗΓΟΠΟΥΛΟΥ, Θεσσαλονίκη.

Καζαντζάκης, Νίκος (1985) *Ασκητική: Salvatores Dei*, Εκδόσεις Καζαντζάκης, Αθήνα.

Καζαντζάκης, Νίκος (2007) *Οι Σπασμένες Ψυχές*, Εκδόσεις Καζαντζάκης, Αθήνα.

Καζαντζάκης, Νίκος (2012) *Ο Πρωτομάστορας [η Θυσία]*, Εκδόσεις Καζαντζάκης, Αθήνα.

Καζαντζάκης, Νίκος (2013) *Επιστολές του Νίκου Καζαντζάκη προς την οικογένεια Αγγελάκη*, Μουσείο Νίκου Καζαντζάκης, Ηράκλειο-Μυρτιά.

Kazantzaki et Sipriot (1990) *Entretiens*, Edition de Rocher, Monaco.

二次文献

Πετράκου, Κυριακή (2005) *Ο Καζαντζάκης και το Θεάτρο*, Εκδόσεις ΜΙΑΤΟΣ, Αθήνα.

Τζερμιάς, Παύλος (2010) *Ο Πολιτικός Νίκος Καζαντζάκης Αυτός ο άγωνστος διάσημος*, Εκδόσεις Ι. ΣΙΔΕΡΗΣ, Αθήνα.

Χολέβας, Ιωάννης (1993) *Ο Μακεδονολάτρης Ίων Δραγούμης Ως Φιλόσοφος, Δημοσιολόγος, Οικονομολόγος και Κοινωνιολόγος*, Εκδόσεις Πέλασγος, Αθήνα.

Angelopoulos, Athanasios (1996) “*Pro-Educational and Charitable Associations in Macedonia during the Final Years of Turkish Rule*”, in Society for Macedonian Studies, *Studies on Macedonia*, Μακεδονιακή Βιβλιοθήκη, pp. 9-37, Thessaloniki.

Bidal-Baudier, Marie-Louise (1974) *Nikos Kazantzaki: Comment L’Homme devient immortel*, Plon, Paris.

Bien, Peter (1972) *Kazantzakis and Linguistic Revolution in Greek Literature*, Princeton University Press, Princeton.

Bien, Peter (1989) *Kazantzakis Politics of the Spirit*, Princeton University Press, Princeton.

Ghețu, Caroline Raluca (2016) *Πιστή και γνώση, άσκηση και δράση Μια Θεολογική και ψυχοκριτική προσέγγιση του έργου του Νίκου Καζαντζάκη*, Διδακτοπική Διατριβή, Αριστοτέλειο Πανεπιστήμιο Θεσσαλονίκης Τμήμα Θεολογίας, Θεσσαλονίκη.

Janiaud-Lust, Colette (1970) *Nikos Kazantzaki sa vie, son oeuvre 1883-1957*, François Maspero, Paris.

Papadopoulos, Stefanos (1996) “*Basic Characteristics of the Liberator Struggles of the Greeks of Macedonia from the Greek War of Independence of 1821 to Macedonian Liberation*”, in Society for Macedonian Studies, *Studies on Macedonia*, Μακεδονιακή Βιβλιοθήκη, pp. 141-150, Thessaloniki.

Terrades, Marc (2005) *Le Drame de l’Hellénisme – Ion Dragoumis (1878- 1920) et la question nationale en Grèce au début de XXe siècle*, L’Harmattan, Paris.

福田耕佑 (2015/5) 「カザンザキスの思想とギリシアナショナリズムー彼の思想の根本と文学作品のライトモチーフとしての「叫び」の観点よりー」 東方キリスト教学会、『エイコーン』第 46 号, pp. 102- 128.

村田奈々子 (2013/1) 「近代ギリシアにおけるヘレニズム概念について」 法政大学言語・文化研究センター編書『言語と文化』第 10 巻, pp. 181-205.

¹ Νίκος Καζαντζάκης (1883-1957): 第五章参照。本稿以降の経歴では、共産主義に傾倒していくも、その後の三度にわたるロシア訪問で共産主義の限界を悟る。以降執筆と旅行に没頭。第二次世界大戦期はレジスタンス活動に従事し、独軍撤退後はソフリス内閣へ入閣する。48年からはフランスに移住し、執筆に専念する。そして 57 年フライブルクで客死する。

² カザンザキスの「ギリシア性」やギリシア・ギリシア人観に関する論証は本稿では行われぬ。この思想が結実していくのは第二次世界大戦期においてであり、具体的な内容に関しては福田 (2016)を参照。

³ Bien (1989 : 13)、Janiaud-Lust (1970 : 157)

⁴ カザンザキスをとり上げる文学史、またギリシア・ナショナリズム研究における意義に関しては、福田(2016)を参照。

⁵ Bien (1989 : 55)及び Τζερμιάς (2010 : 152)

⁶ Ίων Δραγούμης (1878-1920) : 二十世紀のギリシア・ナショナリズムを代表する作家であり、外交官や政治家としても活動した。本稿四章二節参照。

⁷ Janiaud-Lust (1970)及び Bien (1989)

⁸ Τζερμιάς (2010)、Πετράκου (2005)及び Gheṭu (2016)

⁹ Terrades (2005)及び Papadopoulos (1996)

¹⁰ Ιωάννης Κωλέττης (1773-1847) : アルーマニア系出身の、首相経験を持つギリシアの政治家。1835 年にはフランス大使に任命され、フランソワ・ギゾーらと交友を持ち、後に「フランス党」を結成する。

¹¹ Terrades (2005 : 35-43)

¹² Terrades (2005 : 42)

¹³ Terrades (2005 : 40)

¹⁴ この演説を行ったコレッティス自身ロマンス系のアルーマニア人である。この時期のギリシア人という言葉がギリシア語を話す正教徒を端的に意味する場合もあり、ブルガリア語を話す民衆でも自身をギリシア人とみなすケースも見られた。ギリシア人の民族意識に関する詳細は村田 (2013)を参照。

¹⁵ Papadopoulos (1996 : 144)

¹⁶ Papadopoulos (1996 : 144)及び Terrades (2005 : 39) パパドプロスは universal participation、テラドは La Grande idée n'est pas une grande intuition de Kolettis, visionnaire génial. C'est une création collective (以下省略) と表現している。一つの例としてオスマン帝国の支配下にあったマケドニア地方でのギリシア人教育組織が挙げられる。Anegelopoulos (2016)によれば、大半が自助的で自発的な組織であり、女性相互扶助組織も存在した。

-
- ¹⁷ Στέφανος Δραγούμης (1842-1923) : 首相経験を持つギリシアの政治家、法律家。イオン・ドラグミスの父であり、パヴロス・メラスの義父。日露戦争の後に日本人党を設立する。第二バルカン戦争後には首相を務める。ヴェネゼロス失脚後の 1920 年にはテッサロニキの代議士になり、1923 年に死去するまで在職する。
- ¹⁸ Papadopoulos (1996 : 146)
- ¹⁹ Terrades (2005)及び Χολέβας (1993)
- ²⁰ Terrades (2005 : 108-109)及び Χολέβας (1993 : 21) また Papadopoulos (1996 : 145)によると、1876 年にはブルガリアやセルビアに加え、カトリックやプロテスタントの勢力もマケドニアで学校や教会を建設する活動を行っていた。
- ²¹ Terrades (2005 : 75)及び Papadopoulos (1996 : 146)
- ²² Terrades (2005 : 75-76)
- ²³ Terrades (2005 : 81)及び Χολέβας (1993 : 22)
- ²⁴ Δραγούμης (1994a : 5)及び Terrades (2005 : 149)
- ²⁵ Terrades (2005 : 144)
- ²⁶ Χολέβας (1993 : 34)
- ²⁷ Terrades (2005 : 144)
- ²⁸ Χολέβας (1993 : 24) 及び Terrades (2005 : 256)によると、当初はヴェネゼロスに期待を寄せていたものの、第一次バルカン戦争でのヴェネゼロスの指導力に失望し、第二次バルカン戦争後のブカレスト条約でのクレタとテッサロニキの獲得に際しても、ヴェネゼロスへの評価を回復させなかった。以降反ヴェネゼロスの立場を取ったが、国王派というわけではなく、特に国王派を支持する文章も書いていない。
- ²⁹ Terrades (2005)及び Χολέβας (1993)
- ³⁰ Κωνσταντίνος Παπαρηγόπουλος (1815-1891) : アテネ大学教授を務めたギリシアの歴史家。『ギリシア民族の歴史』を著し、古代、中世を経て現代に至るまでのギリシアの連続した歴史観を表明した。
- ³¹ 村田 (2013 : 195)
- ³² Terrades (2005 : 15)
- ³³ Δραγούμης (1991 : 40)
- ³⁴ Χολέβας (1993 : 125) 及び Terrades (2005 : 21)
- ³⁵ Χολέβας (1993 : 29)
- ³⁶ Δραγούμης (1991 : 46)では、もしトルコ人による支配がなければ、新しい文化を發展させられたはずだと述べている。東方の文化から得たものもあつたはずだが、否定している。
- ³⁷ Δραγούμης (1991 : 47-48) そして、外来語を取り入れつつ、ギリシア語そのものは変わることなく、民衆とともに發展し続けたと説く。
- ³⁸ Χολέβας (1993 : 48)
- ³⁹ Δραγούμης (1991 : 71-86)
- ⁴⁰ Δραγούμης (1991 : 84)
- ⁴¹ Περικλής Γιαννόπουλος (1869-1910) : ニーチェの影響を受けたギリシアの詩人であり、代表作は Ελληνική Γράμμη(1903)。
- ⁴² Janiaud-Lust (1970)及び Bien (1989)
- ⁴³ Χρήστος Ανδρούτσος (1869-1935) : イスタンブール等の神学校で学ぶ。各地で教師を務めた後、1912 年から 35 年に亡くなるまで、アテネ民族大学で教義学とキリスト教倫理で教鞭を取る。主な著作は『東方正教会の教義』(Δογματική της Ορθοδόξου Ανατολικής Εκκλησίας)

-
- ⁴⁴ Janiaud-Lust (1970 : 150)
- ⁴⁵ Janiaud-Lust (1970 : 92-93)
- ⁴⁶ Bien (1989 : 8) パリ留学以降カザンザキスはナショナリズム的な思想を伴い活動を開始したが、留学期の動向に関しては不明な点が多い。
- ⁴⁷ Bien (1989 : 18)
- ⁴⁸ Janiaud-Lust (1970 : 144)及び Τζερμιάς (2010 : 153)
- ⁴⁹ Bien (1989 : 8)
- ⁵⁰ ビーンはカザンザキスとヴェニゼロスには十分な面識とカザンザキスの積極的な関与があったことを言及している。しかしゼルミアスはファヌラキスの書簡を援用し、ヴェニゼロスが 1919 年の段階でカザンザキスを認識していなかったし、カザンザキスも積極的にヴェニゼロスに近づかなかったというビーンの見解とは矛盾した見解を取り、また 14 年以降のアトス山旅行以降でも積極的に中央政治に関与しなかったことも併せて指摘している Τζερμιάς (2010 : 139)
- ⁵¹ Καζαντζάκης (2012 : 3)
- ⁵² Καζαντζάκης (2012 : 41)及び Καζαντζάκης (2012 : 37)
- ⁵³ Bien (1989 : 13)
- ⁵⁴ Καζαντζάκης (2012 : 40)
- ⁵⁵ Bien (1972 : 171)
- ⁵⁶ Αλέξανδρος Πάλλης (1851-1935) : ホメロスの現代語訳や福音書の現代語訳 (Ευαγγελικά)を行ったギリシアの文献学者でありディモティキ運動家。特に聖書の現代語訳は文語推進派によって激しく非難される。
- ⁵⁷ Καζαντζάκης (2007 : 288)
- ⁵⁸ カザンザキスの「ギリシア性」の探求については Bien, Peter (2007), *Kazantzakis: Politics of the Spirit*, vol.2, Princeton University Press, Princeton 及び福田(2016)を参照。
- ⁵⁹ Καζαντζάκης (2013: 44-45)
- ⁶⁰ Καζαντζάκης (1985: 70)
- ⁶¹ Χολέβας (1993 : 79) 及び Terrades (2005 : 321)

**Les actions politiques et le nationalisme
de Nikos Kazantzaki
jusqu'au 1922**

—L'influence de Dimotiki et Ion Dragoumis—

Kosuke FUKUDA

Faculté de Lettre, Université de Kyoto

(Société du Japon pour la Promotion de la Science)

Cette thèse analyse les actions et les oeuvres nationalistes de Nikos Kazantzaki entre 1910 et 1922, période pendant laquelle il participait à certaines actions à caractère nationaliste, et propose le proto-motif (prototype) de son idée de la « Grécité », idée qu'il a conservée jusqu'à sa la fin de sa carrière. Kazantzaki lui-même a écrit qu' il avait abandonné son « nationalisme aristocratique » et l'idée dragoumienne (Ion Dragoumis) après l'échec de « Grande Idée » (Μεγάλη Ιδέα) et en effet, il s'est progressivement délivré de l'influence de l'idée politique de Dragoumis. Mais son influence se retrouve subrepticement et perdure dans ses oeuvres littéraires suivantes, notamment dans la perspective de sa « Grécité ».